Fukui Prefectural University

福井県立大学論集　第23号　2004.2

臨地実習における看護学生の高齢者イメージの変化

笠井恭子*・吉村洋子*・寺島喜代子*

Ⅰ．はじめに

看護学生を対象にした高齢者イメージの研究は、これまで、イメージの形成に影響する要因を分析したもの[1-3]や講義や体験学習、実習の前後でイメージを比較したもの[4-7]がある。これらの文献を概観すると、高齢者イメージの形成には祖父母との同居経験の有無など生活背景が大きく影響していることや、授業や実習後は高齢者イメージが肯定的に変化することなどが明らかにされている。否定的なイメージは人間の行動を規制するため、老年看護基礎教育においては、看護学生が高齢者に対して、より肯定的なイメージがもてるような教育のあり方が望まれる。したがって、一つの事象前後の高齢者イメージをとらえるだけでなく、それ以降のイメージの変化についても検討を加え教育方法の示唆を得ることが重要課題である。

そこで、本研究では老年看護基礎教育の内容の充実を図るための基礎資料とすることを目的に、１年間の臨地実習の学習過程を通して看護学生の高齢者イメージがどのように変化するかを専門科目実習前後、老人施設実習前後の４回にわたって調査したので報告する。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象

1999年ならびに2000年に入学した本学看護福祉学部看護学科の３年生89名を調査対象とした。有効標本数は89名（100%）であった。

２．調査内容

高齢者イメージの測定はSemantic Differential Method（ＳＤ法）を使用し、表１に示したように、西川ら[8]が行った因子分析により立証された「行動」「性格」「情緒」「外観」の４因子で構成されている24項目を７段階評価法で用いた。

対象者の属性として、①祖父母との同居経験の有無、祖父母との同居経験がある学生には②祖父母の健康状態、③祖父母への介助体験の有無、④祖父母に対する態度を調査した。態度に関しては「あたたかく接する」「大切にする」「傲慢な態度」「反抗的な態度」などポジティブ、ネガティブ両方の態度を４項目ずつ挙げ、あてはまるかどうか回答を求めた。さらに、⑤老年看護志望の有無を「やりたい」「どちらでもよい」「わからない」「やりたくない」

受理日　2003.12.4
所　属　*福井県立大学看護福祉学部看護学科

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

の４つの選択肢を用いて調査した。

３．調査時期および方法

調査時期を表２に示した。第１回目の調査は３年次10月から始まる専門科目実習の前（以下、各論実習前）に行った。第２回目は３年次１月に実施される老人施設実習の前（以下、施設実習前）に行い、第３回目はその１週間後の老人施設実習終了後（以下、施設実習後）に行った。第４回目は専門科目実習がすべて終了した後（以下、各論実習後）の４年次７月に行った。

いずれの調査も質問紙を用いて自記式による集合調査法で実施した。倫理的配慮として対象者全員に、調査は任意であり、調査内容は統計的に処理すること、個人の成績にはまったく影響はないことを説明し協力を得た。

４．解析方法

データの得点化は「にぎやかな」「進歩的な」などの肯定的表現を７点に、「孤独な」「保守的な」などの否定的表現を１点にし７段階の評定をした。調査時期別にそれぞれの因子について平均値を算出し、属性、施設実習場所との関係をみるためにはｔ検定を、実習進行に伴うイメージの変化をみるためには分散分析を用いて検討した。有意水準は５％とし、解析にはSPSS 10.0J for Windowsを使用した。

表１　高齢者イメージ調査項目（24項目）

【行動因子】		
にぎやかな	－	孤独な
進歩的な	－	保守的な
楽天的な	－	悲観的な
能動的な	－	受動的な
積極的な	－	消極的な
速い	－	遅い
生き生きした	－	生気のない
清潔な	－	不潔な
独立的な	－	依存的な
意義のある	－	意義のない
好意的な	－	拒否的な
自信のある	－	自信のない
幸福な	－	不幸な
【性格因子】		
深みのある	－	表面的な
注意深い	－	不注意な
あたたかい	－	つめたい
正直な	－	不正直な
なめらかな	－	ざらざらした
美しい	－	みにくい
【情緒因子】		
安楽な	－	不安な
気長な	－	気短な
おだやかな	－	はげしい
【外観因子】		
大きい	－	小さい
強い	－	弱い

表２　調査時期

第１回調査（各論実習前）
3年次　10月～12月　　専門科目実習
第２回調査（施設実習前）
3年次　1月（1週間）　　老人施設実習
第３回調査（施設実習後）
4年次　4月～7月　　専門科目実習
第４回調査（各論実習後）

Ⅲ．結　果

１．対象者の属性

①　生活属性

表３に学生の生活属性を示した。祖父母との同居経験がある学生は32名（36.0％）であった。同居祖父母の健康状態をみると、麻痺、寝たきり、痴呆といった障害がある高齢者は３名（9.4％）と少なく、約９割の高齢者が健康であった。

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

表3 対象者の生活属性

項目		n	%
祖父母との同居経験	あり	32	36.0
n=89	なし	57	64.0
同居祖父母の健康状態	健康	29	90.6
n=32	麻痺・寝たきり・痴呆	3	9.4
同居祖父母への介助体験	あり	5	15.6
n=32	なし	27	84.4
同居祖父に対する態度	あたたかく接する	14	78.0
n=18	大切にする	16	89.0
(複数回答)	尊敬している	14	78.0
	感謝している	15	83.0
	傲慢な態度	6	33.0
	反抗的な態度	7	39.0
	無関心である	7	39.0
	不平不満を言う	6	33.0
同居祖母に対する態度	あたたかく接する	25	86.0
n=29	大切にする	25	86.0
(複数回答)	尊敬している	26	90.0
	感謝している	27	93.0
	傲慢な態度	5	17.0
	反抗的な態度	8	28.0
	無関心である	10	34.0
	不平不満を言う	9	31.0

同居経験がある学生（32名）の中で、食事、排泄等の介助体験がある学生は５名（15.6%）であった。また、祖父母に対する態度については、「傲慢な態度」「反抗的な態度」などに比べて、「あたたかく接する」「大切にする」など良好な態度で接していると答えた学生が約８～９割と多かった。

② 老年看護志望状況

図１は各論実習前後の学生の老年看護志望について示したものである。「やりたい」と答えた学生は、実習前21名（23.6%）から実習後29名（32.6%）に増加し、「やりたくない」と答えた学生は実習前７名（7.9%）から実習後３名（3.4%）に減少した。実習前後とも「どちらでもよい」「わからない」と意志が明確でない学生が約６～７割と最も多かった。

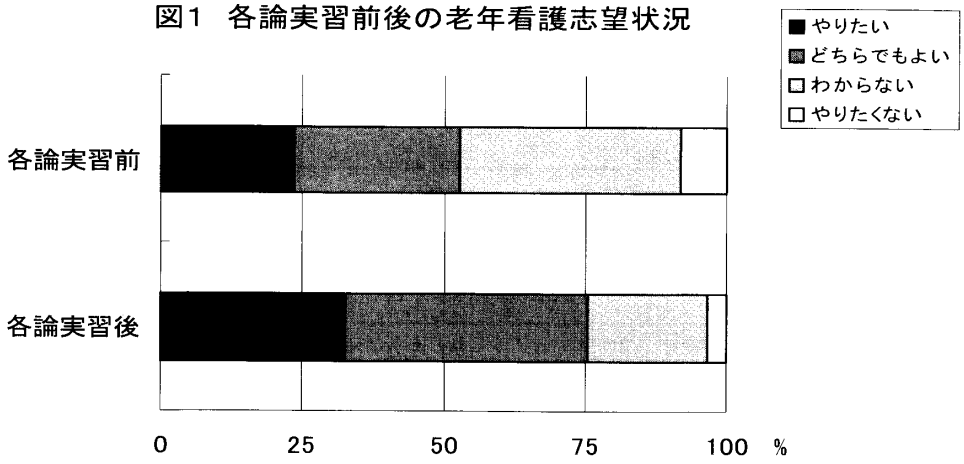
2．高齢者イメージの全体的な傾向と変化

表４は４因子の平均値を示したものである。平均値が最も高いのは「性格因子」であり、次いで「情緒因子」であった。平均値が最も低いのは「外観因子」であり、次いで「行動因子」であった。高齢者の精神面に関わるイメージは高く、身体面に関わるイメージは低いと

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

図1　各論実習前後の老年看護志望状況



言える。

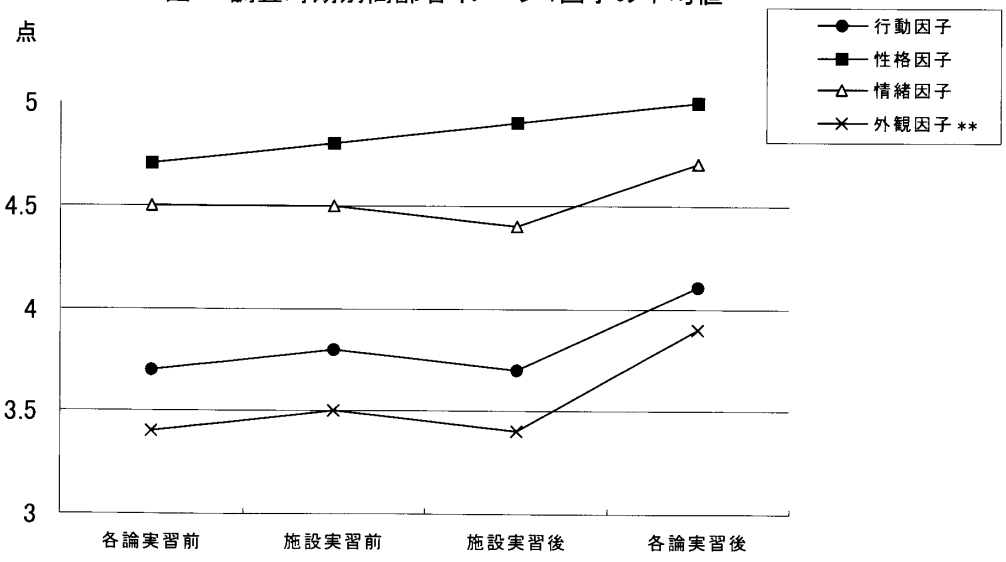
次に、調査時期毎に４因子の平均値をみると（図２）、平均値はどの時期においても「性格因子」「情緒因子」「行動因子」「外観因子」の順に高かった。また、調査時期の早い順に平均値の推移をみると、「性格因子」は上昇し続け、「情緒因子」「行動因子」「外観因子」は、施設実習後に低下するものの各論実習終了後には上昇するという結果であった。

表4　高齢者イメージの4因子の平均値

因子	平均値
行動因子	3.8345
性格因子	4.8470
情緒因子	4.5290
外観因子	3.5224

さらに、因子毎に調査時期を第一要因とする分散分析を行ったところ、調査時期で主効果が認められたのは「外観因子」のみであり（$p<0.01$）、実習進行に伴うイメージの変化は因子によって違いがあることがわかった。

図2　調査時期別高齢者イメージ4因子の平均値



** p<0.01

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

3．施設実習場所別にみた高齢者イメージ

高齢者イメージの全体的な変化の仕方として施設実習後に下がる傾向がみられたため、施設実習の場所別に施設実習前後の各因子の平均値を比較した（図３、図４、図５）。

図3　特別養護老人ホーム実習学生(n=31)の高齢者イメージ

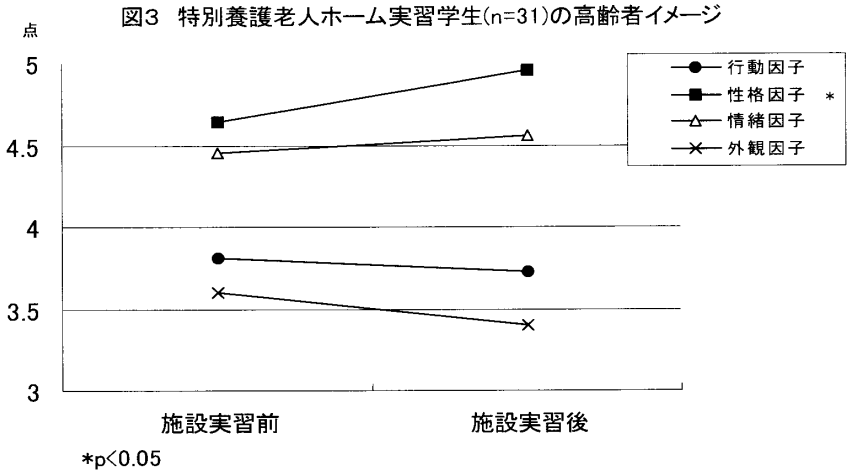


図4　老人保健施設実習学生(n=47)の高齢者イメージ

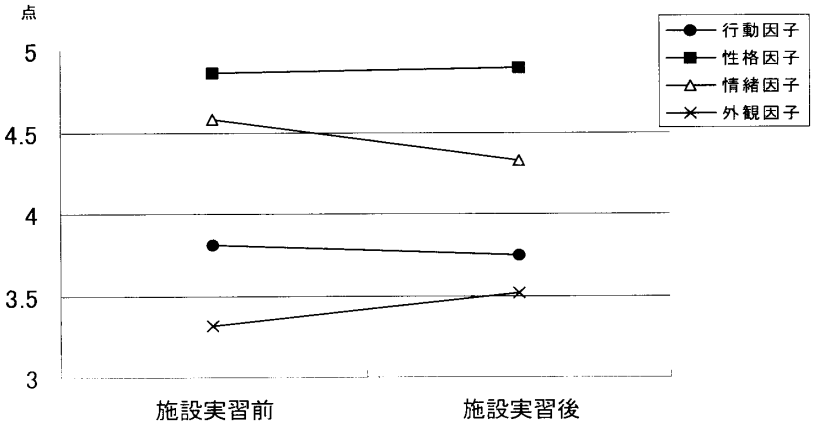
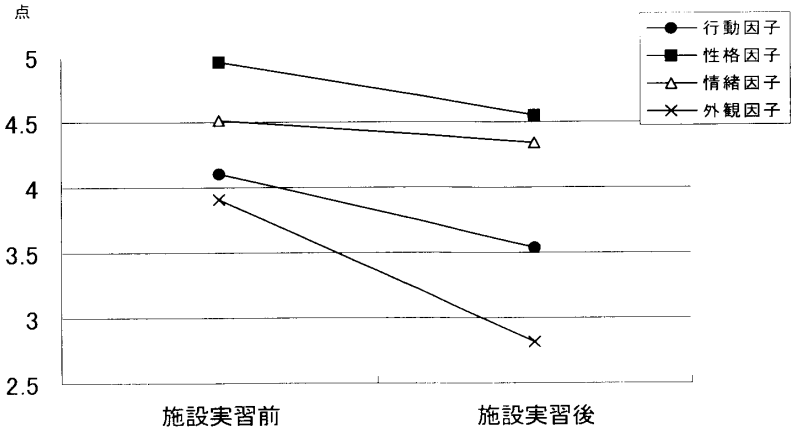


図5　痴呆専門病院実習学生(n=11)の高齢者イメージ



NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

特別養護老人ホームで実習した学生の「性格因子」は実習後有意に高くなり（$p<0.05$）、「情緒因子」は高くなる傾向を示した。老人保健施設で実習した学生の「性格因子」と「外観因子」は高くなる傾向を示した。

３施設とも実習後有意に低下したものはなかったが、特別養護老人ホームでは「行動因子」と「外観因子」、老人保健施設では「行動因子」と「情緒因子」、痴呆専門病院では４因子とも低下の傾向を示した。施設実習前後のイメージの変化は実習場所によって違いがあることがわかった。

４．学生の属性と高齢者イメージ

①　祖父母との同居経験の有無と高齢者イメージ

祖父母との同居経験の有無による各因子の平均値の差をみたところ（表５）、同居体験のない学生の方が「行動因子；$p<0.001$」「性格因子；$p<0.01$」「外観因子；$p<0.05$」において、有意に高いイメージをもっていた。

表５　属性別高齢者イメージ4因子の平均値

因子	祖父母との同居経験		各論実習後の老年看護志望	
	あり(n=32)	なし(n=57)	志望する(n=29)	志望しない(n=60)
行動因子	3.762 ±0.728	3.875 ±0.735 ***	3.830 ±0.743	3.813 ±0.713
性格因子	4.766 ±0.821	4.893 ±0.752 **	4.918 ±0.830	4.786 ±0.738 **
情緒因子	4.508 ±0.764	4.541 ±0.733	4.497 ±0.734	4.527 ±0.779
外観因子	3.363 ±0.217	3.612 ±0.258 *	3.711 ±0.274	3.449 ±0.231 *

1）t検定：＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$　＊＊＊$p<0.001$
2）老年看護志望の分類は「やりたい」と回答した者を「志望する」とし、「どちらでもよい」「わからない」「やりたくない」と回答した者を「志望しない」とした。

②　老年看護志望の有無と高齢者イメージ

各論実習後の老年看護志望の有無による各因子の平均値の差をみたところ（表５）、老年看護を志望する学生の方が「性格因子；$p<0.01$」「外観因子；$p<0.05$」において、有意に高いイメージをもっていた。

Ⅳ．考　察

１．学生全体の高齢者イメージと実習による変化

看護学生の高齢者イメージの全体的な傾向は、「性格」「情緒」に関わるイメージが高く、「行動」「外観」に関わるイメージが低いという結果であった。学生は高齢者の人柄や精神面を肯定的にとらえ、老化や活動性といった身体面は否定的にとらえていることが明らかにな

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

り、これは従来の報告[1), 3), 9)]と同じであった。

高齢者は加齢に伴う身体機能の低下から受療率が高く[10)]、入院患者のうち65歳以上の高齢者が占める割合も高い。そのため、老年以外の実習においても高齢者を受け持つ機会が必然的に増えている。また、老人施設実習では要介護や痴呆の高齢者を受け持つことから、今回の学生のイメージ形成には治療、介護の必要な病弱な高齢者像が大きく影響している。したがって、「行動」や「外観」に関わるイメージが低くなるのは当然と言えよう。

しかし、高齢者の内面は感じとることができていること、最も低いイメージだった「外観」は実習を通して変化し各論実習終了後高くなっていること、他の「行動」「性格」「情緒」に関わるイメージも各論実習後には高くなっていることをふまえると、実習の教育的意義や老人施設実習を専門科目実習終了後ではなく中間に位置づけていることの意義が見い出されるとともに、実習体験が学生の高齢者イメージの形成や変化に大きな影響を与えていると考えられる。教育する側は、学生の高齢者イメージは実習を通して修正されながら最終的には肯定的に変化していくことを認識し、高齢者の加齢による身体的な変化をより肯定できる教育内容を考えていく必要があると考える。一口に高齢者といってもその姿は多様で、すべての高齢者が健康を損ね日常生活に支障があるわけではなく、健康ではつらつとした高齢者も増加しているのが現状である。したがって、学生の高齢者イメージを広げ刺激するという観点から、地域で生活する健康なお年寄りの集いやクラブ活動に参加させて交流の機会を設けるなどの取り組みを促していく必要があると考える。

2．施設実習場所におけるイメージの相違

老人施設実習における実習前後のイメージの変化を実習場所別に検討した。

特別養護老人ホームで実習した学生のイメージは、「性格」に関わるイメージが実習前に比べ実習後有意に高くなり、「外観」に関わるイメージは低くなる傾向を示した。老人保健施設で実習した学生のイメージに有意な変化はなかったが、「外観」が高くなり「情緒」は低くなる傾向を示した。痴呆専門病院で実習した学生のイメージはすべて低くなる傾向を示した。

佐瀬ら[11)] は学生の高齢者イメージと実習した施設の介護度との関連を報告しており、池田ら[12)]は介護体験や痴呆高齢者との接触という特殊な体験は否定的イメージに強く影響すると指摘している。本調査においても、３施設それぞれ介護度、処遇内容、活動内容に特徴があることから、それらが学生の高齢者イメージの形成や変化に影響をもたらしたと考えられる。特別養護老人ホームは、老人保健施設に比べて介護度が高い高齢者が入所しているため、身体面に関わるイメージが否定的な方向へ傾いたのではないかと考えられる。一方で、生活の場に入りじっくり関わることで高齢者の内面や気持ちを感じとることができたのではない

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

かと推察する。老人保健施設は中間施設であることから活発で自立している高齢者も多い。そのことが身体面に関わるイメージの肯定的な変化に影響を与えたのではないだろうか。しかし、「安楽な」「おだやかな」といった情緒面のイメージは否定の方向に傾いている。自立度がある程度高いのになかなか家庭復帰できない高齢者の姿からは情緒の安定を感じとることができなかったのではないかと考える。痴呆専門病院は幻覚、妄想、徘徊などの様々な症状を有する痴呆高齢者が入院している。１週間という限られた期間内に、自発的な生活行動がとれない痴呆高齢者を理解しコミュニケーションをとっていく自体、学生にとってはかなり困難であることをふまえると、すべてのイメージがマイナスに傾いたのも当然であろう。

以上のように、施設の特徴から学生の高齢者イメージを検討してみると、学生の高齢者イメージは接触した高齢者の特徴に大きく影響されていることがわかる。このことは高齢者をありのままとらえていると考えられ評価できる点でもある。しかし、看護者の高齢者に対する否定的なイメージは高齢者理解やコミュニケーション上の妨げになる[13]ことから、教育する側は、介護度の高い高齢者や痴呆高齢者に焦点をあて、学生が彼らに関心をもちその姿を認めていけるよう、意図的に人間らしい部分を学生に示すなどの刺激を続け、少しでもイメージを高めることができるような教育のあり方が望まれると考える。また、今後、さらに調査データーを積み重ね、基礎教育の段階での痴呆専門病院実習が妥当かどうかということも考慮していきたいと考える。

３．学生の属性と高齢者イメージ

今回、調査対象となった学生の祖父母との同居率は36.0％で、平成12年の全国の三世代世帯割合10.6％[14]を大きく上回っており同居率が高い集団と言える。同居祖父母の約9割は自立した高齢者であり、祖父母を介護した体験がある学生は少ない。また、多くの学生は祖父母に「あたたかく」「大切に」接していると回答している。

しかし、同居経験の有無と高齢者イメージとの関係をみると、経験のない学生の方が高齢者の「行動」「性格」「外観」に関わるイメージを肯定的にとらえていた。大谷ら[3]も、同居経験はむしろ高齢者イメージを低下させる方向に作用すると報告しているように、同居経験がある学生は、日頃の「健康な高齢者像」と実習における「病弱な高齢者像」とのギャップを感じることによってイメージが低くなったのではないかと考えられる。また、高齢者イメージの影響要因として高齢者との会話の頻度を指摘している研究[1), 3), 15]があることから、同居祖父母に限定せず、一般の高齢者と接する機会や頻度など、関わりの密度や質まで把握しイメージとの関連を検討した上で、実習指導上の資料として活用することが望まれる。

老年看護志望の有無と高齢者イメージとの関係では、志望する学生の方が高齢者の「性格」「外観」に関わるイメージを肯定的にとらえていた。小泉ら[9]が「肯定的なイメージをもつ者

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

ほど高齢者と積極的に交流したい考えである」と述べているように、老年看護を志望する学生は高齢者と積極的に関わっていくと考えられ、その深い関わりの中で高齢者の「身体は老いても人間としての円熟さ」といった部分に着目し肯定的にとらえることができるのではないだろうか。実習終了後、老年看護を志望する学生が増えたことを合わせて考えると、老年看護学の教育において期待がもてる結果であり実習の教育的意義が見い出されたと考える。今後も、学生が高齢者に対してより肯定的なイメージが抱け、老年看護への希望や意欲をもてる教育を展開していく必要がある。

V．結　論

看護学生の高齢者イメージを「行動」「性格」「情緒」「外観」の４因子からなる既存の高齢者イメージスケールを用いて調査したところ、以下のことが明らかになった。

1．学生全体の高齢者イメージは、「性格」に関わるイメージが最も高く、「外観」に関わるイメージが最も低かった。

2．実習を通して変化があったのは「外観」に関わるイメージであった。

3．特別養護老人ホームで実習した学生の「性格」に関わるイメージが実習後有意に高くなったが、老人保健施設と痴呆専門病院で実習した学生のイメージは実習前後で差はなかった。

4．祖父母との同居経験の有無と高齢者イメージの関係をみると、経験のない学生の方が「行動」「性格」「外観」イメージが有意に高かった。

5．実習後の老年看護志望の有無と高齢者イメージの関係をみると、志望する学生の方が「性格」「外観」イメージが有意に高かった。

6．以上の結果より、実習体験が学生の高齢者イメージの形成や変化に大きく影響していることから、実習の教育的意義が明確になり、今後も、学生が肯定的な高齢者イメージを形成できる教育の必要性が示唆された。

謝　辞

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。また、研究をご指導いただきました富山医科薬科大学の成瀬優知先生に御礼申し上げます。

文　献

1）吉田正子他：看護学生の老人イメージに関する研究（1）－学生の生活背景と老人イメージ－，神戸市立看護短期大学紀要第11号，55-64，1992

2）鳴海喜代子他：看護学生の老人観に関する研究　第２報－祖父母との交流の検討から－，帝京平成短期大

NII-Electronic Library Service

Fukui Prefectural University

学紀要２号，29-36，1992
3）大谷英子他：老人イメージと形成要因に関する調査研究（1）大学生の老人イメージと生活経験との関連，日本看護研究学会雑誌18（4），25-38，1995
4）鳴海喜代子他：看護学生の老人観に関する研究　第４報－看護学部学生の講義前後，及び実習後の変化－，千葉大学看護学部紀要12，11-19，1990
5）多田敏子：老人看護学における臨地実習による看護学生の高齢者に対する印象の変化，老年看護学１（1），63-70，1996
6）滝川由美子他：看護学生の高齢者イメージの変化－老年看護学概論の授業前・後の比較－香川県立医療短期大学紀要第１巻，51-60，1999
7）服部紀子他：老人イメージの変化－高齢者模擬体験前後の比較から－，東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報第11号，12-25，2001
8）西川千歳他：高齢者の老人イメージに関する研究（2），神戸市立看護短期大学紀要第12号，83-90，1993
9）小泉美佐子他：ライフ・ヒストリー・インタビューによる看護学生の高齢者イメージの変化－高齢者一般のイメージとインタビューに応じた高齢者像の比較から－，群馬保健学紀要19，31-36，1998
10）厚生省監修：平成12年度版厚生白書，ぎょうせい，60，2000
11）佐瀬真粧美他：老人保健施設実習における看護学生の老人イメージについて，帝京平成短期大学紀要第5号，45-50，1995
12）池田敏子他：老人に対するイメージとその形成に影響する因子，第22回日本看護学会収録（看護教育）83-87，1991
13）小山真理子他：看護大学生の老人および老人ケアに対する態度，看護教育36（9），815-819，1995
14）厚生労働省大臣官房統計情報部編：平成12年国民生活基礎調査，厚生統計協会，32，2000
15）保坂久美子他：大学生の老人イメージ－SD法による分析－，社会老年学27，22-33，1988

NII-Electronic Library Service